

P-1-19

QCサークル活動の取り組み

那須赤十字病院 業務改善推進部

○^{たむら}田村 ^{かつゆき}勝幸、伊藤 俊幸、十河 匡光、高久由美子、菅野 麗美、中谷 琢美、倭文 雪江、志村 哲、唐橋 正弘、高橋美知子、白石 悟

【はじめに】当院では医療の水準の向上ならびに医療サービスの充実を図るため、職員の経営参画の意識及び自己啓発・相互啓発を促し、業務改善活動の推進を行っている。当部会は、QCサークル活動、チーム医療活動の2本柱で行っている。平成27年度からチーム医療の報告会、平成19年度から業務改善、人材育成の一環としてQCサークル活動を開始した。今回、平成19年から12年間QCサークル活動が継続されたので報告する。【目的】QCサークル活動を通じて、仕事に必要な知識や技術の習得、創意工夫、病院の経営に貢献、コミュニケーション能力を高め、明るい職場を作る。【方法】毎年5月にQCサークル活動の研修会を全職員対象で行ないキックオフとなる。院内QC大会は12月に実施され、表彰式を病院の忘年会で実施する。活動は5月から11月まで行なう。テーマの選定、現状把握、目標設定、要因分析、対策の立案・実施、効果の確認を行う。活動を行なうに当たり、推進者が各サークルのアドバイザーを行ないサポートし、円滑に行えるように部会に協力する。【経過】活動サークル数は毎年15から20チームのエントリーがある。看護部、医療技術部、事務部から参加があり、病院全体として活動を行っている。活動内容は5S、業務改善、医療安全、医療の質、コストに関連する幅広いテーマで改善活動を行っている。また、活動を推進する推進者は現在8名になり、開始当初より厚いアドバイスが可能となった。【結論】QCサークル活動を行うことにより、業務改善や職場環境の改善ができ、スタッフの士気を高め、人材育成にも効果があった。今後は多職種でチーム医療中心とする活動を推進したい。

P-1-21

RPA活用による業務改善の取り組み

旭川赤十字病院 事務部

○^{ながえ}長江 ^{のりゆき}範之

【はじめに】働き方改革の動きがある中、医療機関においても勤務環境改善に向けた業務効率化が急務となっている。また、日本の生産労働人口は減少傾向が続いており、今後、さらに人材の確保が困難な状況が生まれると考えられる。このような医療環境において、定型的なパソコン操作をソフトウェアのロボットにより自動化できるRPA (Robotics Process Automation)の技術を活用することにより、職員の事務作業量を大幅に削減し、業務効率の改善を図ることが可能と判断した。その導入経緯、および使用状況・効果について報告する。【方法】RPAへの移行業務としては、事務職員の業務分掌・業務マニュアルの中で、業務量が多い定型的な業務、ルール化が可能なパソコンでの業務を対象とした。今回報告する業務は、外来アシスタントが行っている電子カルテへの病名代行入力業務をRPAへ移行することとした。この業務は外来アシスタントが月中、月末、月初の計3回、1回につき約4000病名を一覧表から電子カルテに代行入力を行っているものである。【結果】当該業務の超過勤務時間としては、6ヶ月間の実績では月平均44.32時間となっており、削減金額としても月額56,300円が見込まれる。また、当該業務は勤務時間内に削られており、外来看護師の一部業務を外来アシスタントへタスクシフティングすることが可能と思われる。【考察】RPAが行える業務処理能力においては、医事業務、財務・経理業務、総務・人事業務など事務職員の業務に対して有用性が高い。また、看護・コメディカル系業務においてもExcelなどにより作業・管理している業務は導入が可能である。働き方改革への取り組みとして、院内での導入を積極的に行いたいと考えている。課題としては、RPAのシステム操作には、専門的な知識が必要であり、導入推進を図るには内部管理体制を構築する必要がある。

P-1-23

病院情報システム端末の故障対応改善について

福岡赤十字病院 情報システム課

○^{たしま}田島 ^{りょう}亮

経年劣化に伴い、パソコンの故障台数が増加している。故障にかかる対応時間の短縮と修理費用の削減を図るため、代替機器を用いた対応方法と修理依頼のとりまとめを実施し、故障対応をスムーズかつリーズナブルに行うことに取り組んだ。【目的】修理等にかかる業務の効率化を図り、対応時間を短縮させるとともに、修理費用を抑制する。【方法】H27年度～H30年度上半期までのパソコン台数、故障発生件数、修理費用等の推移を分析する。・故障対応時間短縮のため代替機器の活用を検討する。・修理依頼回数を減らすことで修理費用の削減を狙う。【成績・評価】代替機器を活用することで現場の復旧時間を約20～30分短縮でき、対応時間に余裕ができたため、複数台の修理をまとめることが可能になった。・複数の修理をまとめることで出張費を削減することができた。・修理が完了するまでの間の代替機器の不足・特別なソフトウェアの入った端末の代替機器の不足・ソフトウェアライセンスの管理が複雑化、修理待ちの端末ならびに代替機器の管理が複雑化。【結論】現場の復旧時間の短縮と修理費用の削減から一定の成果はあったが、情報システム課の対応時間の短縮には至らなかった。○今後の取り組み・代替機器の適正台数の検討・代替機器を活用した際のIT資産管理台帳の管理

P-1-20

医療材料情報管理システムの試作

岡山赤十字病院 臨床工学技術課¹⁾、岡山赤十字病院玉野分院²⁾

○^{またら}多田 ^{ひろし}羅 弘¹⁾、小西池泰三¹⁾、三宅 裕子¹⁾、藤原 照美¹⁾、大森 俊孝²⁾、石川 雄輝¹⁾、橋田美早紀¹⁾、西崎 幸子¹⁾

【はじめに】院内で使用する医療材料は多種多様であり、これらの情報把握、管理は困難である。我々は2018年より、独自に医療材料情報管理システム(以下システム)を試作し、材料に関連する情報の一元管理、共有化を進めている。試作したシステムの概要とコスト削減の取り組みについて報告する。【対象および方法】データベース作成にFileMaker Pro 17 Advancedを使用した。材料基本情報、ベンチマーク情報、購入実績情報、定数配置情報、保険償還情報、材料申請書情報、画像、カタログ、添付文書、取扱説明書データ等のインポートを行い、システムを試作した。材料を実際に使用する職員、購入に関わる職員、保険請求に関わる職員等が便利に利用できるように多職種によるカンファレンスの中でヒアリングを行い、機能の追加やレイアウトの更新を進めた。またこのデータをもとに同等品や分類別にリストアップを行い、コスト削減が可能な材料や状況の分析を行った。【結果および考察】システムを作成したことで、材料についての関連情報が集約され、見える化が進んだ。そのため材料の分類や使用状況等の把握が容易となった。多職種で利用可能な機能やレイアウトを実装した。また同等品や分類別のリストを作成し、材料の見直しや集約化を図り、コスト削減や安全性向上に繋がる。現状は端末1台での運用のため現場で情報を閲覧することができず、必要に応じて紙やPDF形式でのデータ提供しかできない。現場で手軽に金額情報が閲覧できるようにになれば使用者の貢献意識が育ち、さらなるコスト削減に繋がり、加えて機能向上による医療安全でも貢献できると考える。今後は、FileMaker Serverを導入し、院内LANの端末から情報の閲覧、利用できる環境を構築していきたい。

P-1-22

請求担当事務職員を病棟へ配置転換して

足利赤十字病院 事務部 医事課¹⁾、足利赤十字病院 事務部 事務部長²⁾

○^{はたまたら}波多由香里¹⁾、赤間 弘美¹⁾、花茂 直美¹⁾、石原 匡司²⁾

当院は、平成23(2011)年7月に新病院へ移転した。旧病院では、主にクラーク業務を行う事務職員を病棟に配置し、請求業務は事務室で請求担当の事務職員が行っていた。新病院への移転を機に病棟で請求業務ができるように事務職員を配置転換した。今回、病棟に請求担当者を配置したことで、どのように変化したかを報告する。旧病院では請求業務を事務室で行っており、実際に患者や家族と接する機会が少なく、患者の情報を迅速に得ることが困難であった。また、紙カルテでありすべて伝票運用であったため、どのような処置をしたのか伝票だけでは分からないことも多く、その都度確認のため病棟へ足を運んでいた。医師へ文書作成依頼や、確認事項があるときは、担当医師の外来や手術が終わってからになってしまったため、時間外業務も多くなっていた。新病院へ移転し、患者や家族と接する機会も増え、医師・看護師とも密にコミュニケーションがとれるようになった。分からないことがあっても病棟にいることですぐに医師・看護師に確認することができ、より正確な保険請求が可能になった。また未収対策の面でも、支払困難・未収金多額・保険未加入などの患者が入院した場合、以前は患者の家族が来院した際に連絡を受け病棟に向いていたが、病棟に在席することで対応しやすくなった。それにより、医療費の未収も以前より防ぐことができるようになった。さらに旧病院で配置していた病棟事務職員の人員分は医師事務作業補助者となったことで、収益増加につながった。電子カルテを導入したことも大きな変化であったが、それと同時に各病棟へ請求担当者を配置転換することにより、医師・看護師・コメディカルとの連携がスムーズになり、保険請求業務の質の向上にもつながったと考える。

P-1-24

「NURSE」を活用した意思決定支援の看護実践－看護師の自己効力感向上との関連－

長浜赤十字病院 看護部¹⁾、長浜赤十字病院 医局²⁾

○^{とくし}禿子 ^{みわ}美和¹⁾、樋口 啓子¹⁾、中村 彩里¹⁾、中川 笑里¹⁾、馬淵 菊美¹⁾、平居 昭紀²⁾

【はじめに】「NURSE」は患者の感情表出を促すコミュニケーションスキルで、対象の心の揺れ、怒り、悔しさ、寂しさなどの溢れる感情に焦点を当て、そのような気持ちになることは当然であるという理解をベースに感情の探索を行い、患者自身が自らの感情に気づき対処していけるように変容を促すことができると言われている。患者や家族のニーズをとらえ意思決定を支援する看護ができるために、「NURSE」を学習して看護実践に活用できるように取り組んだ。そして、その看護実践を意図的に振り返ることを行った。その結果、看護師の自己効力感が向上したので報告する。【方法】1. 「NURSE」の学習会の実施 2. 介入場面の事例検討会の実施 3. キャリア開発ラダーの評価会の実施 4. 自己効力感およびストレスセルフチェックの調査による評価 【結果】1. 学習会開催2回 2. 事例検討会の実施件数21回 3. キャリア開発ラダーの評価会の実施件数8回 4. 自己効力感: 6.8→8.0 ストレスセルフチェックの総合健康リスク: 105→86 【考察・まとめ】「NURSE」を学習し感情表出に特化したコミュニケーション方法を習得し、患者の意思や感情を意図的に聴き出し、患者や家族のニーズをとらえ意思決定を支援する看護を実践できるようになった。そして、事例検討会やラダーの評価会でその看護実践を振り返り語り合うことが、看護師の自信にもつながった。そのことが、看護師のやりがい感につながり、自己効力感の向上および総合健康リスクの軽減にも影響したと考える。

一般演題(ポスター)抄録
10月17日(木)